

原発ゼロへ 台湾の決断

中「日の丸原発」

計画の詳細 住民に伝えず

台湾・台北市から東に約40キロ。若者が波乗りを楽しむ新北市貢寮区の海沿いに、完成目前で建設が中止された台湾電力第4原発がたたずむ。1号機の原子炉圧力容器は日立製作所、2号機は東芝、両タービンは三菱重工工業が供給。地元の

人は「日の丸原発」と呼んでいる。

◆組織を設立

第4原発は、国内市場の先細りを見越した日本メーカーが海外輸出に初挑戦したモデルケースとなるはずだった。

「発電所を造ると聞いていたが、原発とは知らなかった」。約1キロ離れた同区内で電器店を営む呉文通さん(62)によると、用地買収は1980年代に始まった。立ち退かないといけない理由を知らされないまま400人以上が転居したと

いう。

台湾電力は88年によく住民説明会を開いたが、原発建設に関する詳しい説明はないまま、突然くじ引き大会が始まった。呉さんは景品としてテレビ、洗濯機、扇風機を受け取った。翌日、新聞を読んだ呉さん

んはがくせんとした。「地元は原発建設に賛成」と報じられていたからだ。憤った住民は建設に反対する組織を立ち上げた。反原発組織が地方で芽吹いた瞬間だった。

日本で原発を建設する場合、地元同意は欠かせない

メモ 台湾市民が放射能の恐怖を身近に感じた問題が1992年に発覚した。台湾行政院(内閣)の原子力委員会によると、放射性物質で汚染された建材を使用したマンションなどの建物1664戸が台湾全域で見つかったのだ。現地では「放射(ふくしゃ)汚染建築物(輻射屋)」と呼ばれる。学校も10校含まれていた。台北市内の汚染建築物は83年に建てられた地上

7階建てマンション。今年2月中旬に訪れた際は空室が多く、線量計で計測すると毎時0.3マイクロだった。建設当時はさらに高く、男性警備員(70)は「ほとんどの住人は病気で引越した」と話していた。原子力委員はこの建材が使われているか質問すると、「製造した工場が倒産しており分からない」と回答した。

(台北共同)